

ポツダム時代のシュトルムのノヴェレ

西 野 雅 二

岡山理科大学工学部

(1994年9月30日 受理)

I

シュトルムが生まれ育った町のあるシュレースヴィッヒ・ホルシュタイン地方は当時デンマークの統治下にあったが、デンマークがシュレースヴィッヒ公国を併合しようとしたのに対して1848年にレジスタンスの戦いが始まった。このレジスタンスをプロイセンが支援し、本格的な戦争状態におちいった。この戦いは48年から50年まで続いたが、敗戦し、プロイセンは支援から手を引いたので、フーズムは再びデンマークの支配を受けることになった。デンマークの動きに大いなる怒りを抱いたシュトルムは、詩で反デンマーク熱をおおったりもしている。『1850年の秋に „Ostern im Herbste 1850“』の初稿で

たとい、われわれは、最後の一人にいたるまで
滅び去ろうとも
子から子らへとうけつがせなくては
ならないのは
裸の剣と、ひびきわたる歌だ¹⁾。

と歌って、デンマークに対する激しい反感を書いている。

敗戦後、デンマークの支配に耐えられないシュトルムは、弁護士の職を続けられなくなり、生活難になる。活路を求めて亡命をすることを決心した。ベルリンのジャーナリストのヘルマン・クレトケ(Hermann Kletke)あての手紙では「職を求めてドイツを歩き回る」²⁾と書いているし、メーリケあてにも「プロイセンに移ろうとしている」「近い将来は灰色」³⁾だと伝えている。

シュトルムは、「親友たち、たとえばニーブーア (Niebuhr フリードリッヒ・ヴィルヘルム四世の内閣顧問) や影響力の大きい政治家、たとえばマントイフェル (Manteuffel プロイセン政府の大臣) のとりなし」⁴⁾を受け、1853年10月、ようやくのことでプロイセンで職を得ることが出来た。判事補に任命され、12月からベルリン近くのポツダムの地方裁判所に勤務することになったが、当初は無給のため、シュトルムにとって異郷の地であるポツダムでの亡命生活は経済的にも大変なものであった。しばらくして月に25ターラーから40ターラーの収入があるようになったが、家賃にも満たないものであり、それまでの作品の

印税では食べていくことも出来なかった。妻と3人の子供をかかえた身でありながら、さらに4人目の子供リースベトの誕生を迎え、シュトルムは父親の支援なしには家族を養うことが出来なかった。

このように、ポツダムでの亡命時代は経済的にも、慣れないプロイセンの法律に携わるという仕事の面でもシュトルムの生涯の中では最も苦しい時代で、いわゆるホームシックにかかっている状態でもあった。また、健康状態もおもわしくはなく、胃や背骨の病気により、1854年1月から二カ月半ほどは仕事も出来ないような有様であった。より良い職を求めて転勤の希望を持っていたシュトルムは、1856年7月にハイリゲンシュタットの地裁判事に任命する旨の知らせを受け取るまでの約二年半の苦しい時代をポツダムで過ごした。このような状態にあったので、フーズムで抒情詩を書き、ノヴェレ『みずうみ』で作家としての地歩を固めたかに見えたシュトルムは、ポツダムではわずかに3編の短編と若干の詩しか創作することが出来なかった。

ポツダムはプロイセンの首都ベルリンに隣接しており、このためシュトルムはベルリンの文化人クラブ（1827年に創立された「シュプレー川上のトンネル Der Tunnel über der Spree」）を通じて中央文壇に接近することになった。しかし、シュトルムは正式の会員にはなっていない。なぜならば、「彼も、彼が朗読するものも、その場や人たちにはピッタリ合うような雰囲気ではなかった」⁵⁾からである。すなわち、「シュプレー川上のトンネル」は「ボーイたちがあちこち行く間に何らかの任意のものが朗読されるような、タバコとコーヒーのサロン」の域を出るようなものではなかった⁶⁾。詩人などをはじめとする文化人との交流があったにもかかわらず、生活そのものが苦しいシュトルムは創作に没頭出来るような状況にはなかった。しかし、この時代のパウル・ハイゼやゴットフリート・ケラーとの交流はその後も書簡を通じて長く続いており、自作に評価を望むシュトルムにとっては大いなる励ましになった。

本稿では、ポツダム時代のシュトルムの人生観がよく表れている『陽の光のなかで』について考察を加えることにする。後年、この作品を読み返したシュトルムは、自分の創作した作品に圧倒され、「その中に私の心を見つけることができます」と妻にあててに書いている⁷⁾。

II

この作品の成立の経緯をシュトルムは母あての手紙で、「私はこれをこの夏、サンスシでの昼の散歩中にみつばちのようにして拾い集めました。そこでは絵画館の前にはまだロココ時代の古いツゲの木の刈り込みがきらめき、香りを漂わせていました。これはお母さんに、私がこの悲惨な現実を離れてどこへ逃げ出そうと考えているかを示すでしょう」と述べている⁸⁾。シュトルムは経済的、精神的、そして肉体的にも大変な目に直面しているという苦渋の現実から逃れ、ロココ時代という昔の想像の世界に慰めを求めようとしているの

である。このような状況のもとで書かれた作品であるので、シュトルムはハイゼに「前半はひよっとしたらあなたの気にいるでしょう。後半部は残念ながら著者である私もほとんどと言ってよいほど気にいりません」と、自信なさそうな気持ちを伝えている⁹⁾。シュトルムは、後年、何年にもわたって自分のノヴェレに関して自信のなさを抱いているが、これがこの初期の手紙から見てとれる¹⁰⁾。

当初、シュトルムはこの作品を『アルゴ文学年鑑』に発表するつもりで、フォンターネに問い合わせをしているが、これは実現せず、結局のところ、『陽の光のなかで 3つの夏物語』という表題のもとに、『広間にて』、『マルテとその時計』とともに単行本として発表された。

『陽の光のなかで』は二つの章からなりたっている短編である。二枚の絵を見るようであり、また、動きの少ない二幕物の芝居を見るようでもある。二つのシーンには直接的な連結はなく、二枚の絵を並べて置いたような感じを与える。シュトルムのほとんどのノヴェレは枠物語の形をとっており、枠のなかで出来事が描写されるのであるが、この作品には枠がなく、また枠内物語として呈示されるような出来事にも乏しい。シュトルムは、二つのシーンの間で読者に想像力を働かさせる。ハイゼの評によれば、二つの章は「予感に満ちた糸で結ばれている」のである¹¹⁾。

第1章では、ある夏の日の午後の光景が描かれる直接的な物語である。若い将校がある家の庭の中に入ってくる。その将校は友人であるその家の若い男に迎えられ、この家の娘の所へ行くようにうながされる。この家の娘フレンツヒェンと将校のコンスタンティンは恋仲であった。庭の中の小さな園亭の中ではフレンツヒェンが商家である家の手伝いとして帳簿に次から次へと数字を記入している。コンスタンティンが中に入ってもフレンツヒェンは計算に余念がないようなので、コンスタンティンはやめさせようとばかりそっとペンを取り上げる。インクが彼女の手につくが、それを拭き取る。このようにしている時に町の方から軍楽が響いてきた。コンスタンティンの連隊の軍楽であった。

仕事を続けたいフレンツヒェンからしばらく遠ざけられたコンスタンティンは、女神フローラの大理石像が立ち、ツゲの木がきれいに刈り込まれたロコロ風の庭の中を歩き、ベンチに腰をおろした。このとき、庭の花を目指してゆっくりと茎を上ってくる虫に気づき、危険にさらされた花を見つけ出して虫を叩き落とそうとするが、葉の間できらめく日光に目がくらみ、目をそむけざるを得なかった。籐の杖で虫をめがけて突こうとした時にフレンツヒェンが現れた。

フレンツヒェンは夕方の食卓のためであろうか、バラの花を切りとる。愛する二人は「一緒にいて、時が鳴るのを „Beisammen sein und die Stunden schlagen hören.“」¹²⁾ 聞いた。フレンツヒェンはコンスタンティンに、子供の頃に抱いた恋心を語った。コンスタンティンも自分の抱いた感情をフレンツヒェンに語り、二人は「世界いっぱい „eine Welt voll“」¹³⁾ の幸せに浸っているようであった。

第二章では、時が変わり、60年以上もあとのことになる。庭に面した部屋に老夫人がコーヒーを飲みながら座っている。第二章はこの老夫人の回想が主となって話が展開する間接的なものとなっている。ソファの向かい側には孫が座っている。孫のマルチンはソファの上方にかけられたある一家の肖像画を見ていた。この中に、真っ赤な服を着て髪にはバラの花をさし、胸にロケットを垂れ下がらせたフレンツヒェンの絵もあった。フレンツヒェンはマルチンの祖母の夫にあたる祖父の姉妹だった。

マルチンの祖母はフレンツヒェンを思い出して、字を書くのが上手だった、彼女は誰とも結婚しなかった、と語る。祖母の話によれば、フレンツヒェンには好きな男がいたが、彼は軍人であり、かつ貴族であった。「お前のおじいさんの友達で、立派な男の人だったのですよ。でも彼は将校であり貴族であったの。そしてお前のひいおじいさんはいつも軍隊が大嫌いだったのよ。„Es war ein Freund deines Großvaters und ein reputierlicher Mensch. Aber er war Offizier und Edelmann; und dein Großvater war immer sehr gegen das Militär.“」¹⁴⁾

二人は結婚出来ず、50年ばかり前にフレンツヒェンが死亡し、コンスタンティンはその後、離れたところに小さな領地を得て、そこで自分の未婚の姉妹とともに暮らしたとのことであった。

このように祖母から昔話を聞いているときに、この一家の墓の修理をしていた職人が墓の中で見つけたロケットを持ってきた。内部には黒い髪が見えた。このロケットがフレンツヒェンのものであることは明白だった。

III

この作品の成立の背景をシュトルムは自伝の断片¹⁵⁾の中で述べているので、次にここから要約することにする。

先ず、シュトルムの母方の最重要人物として曾祖父についての記述がある。この曾祖父はシュトルム誕生の前に亡くなってしまっていたので、もちろん直接は知らない。壁にかかっていた肖像画には、髪粉をつけて口元をギュッと引き締めた顔が描かれており、厳格な感じを与えるが、青い目は親しみのこもったものであった。曾祖父はフーズムの町の最後の大商人であり、船を所有し、クリスマスには貧しい人々のために牛肉をふるまうこともあった。

この曾祖父の肖像画の上に、その娘のフリッツヒェンが真っ赤な服を着て髪には赤いバラの花をつけ、胸に黒いロケットをさげている様子を描いた絵がかかっていた。作品の第二章でこの肖像画について記述がなされている。シュトルムは子供のころにフリッツヒェンの胸のロケットを見つめ、中に何が入っているのだろうと考えたとのことである。このフリッツヒェンは作品のフレンツヒェンに描かれているように、家の商売の計算の手伝いをよくしており、また、有能な軍人を愛していたが、結婚に至ることはなかった。

1848年ごろにシュトルム家の墓の修理がなされた。ある陽のあたる午後、シュトルムが母と居間で茶を飲んでいる時に、職人が壊れた棺の中で見つけた小さなロケットを持って来た。詳しい話を聞いた母はその棺がフリッツヒェンのものであることをさと、黒いロケットがはっきりと描かれている絵を見やった。シュトルムがそのロケットを開けると、中には黒い髪が入っていた。この黒髪が誰のものであるかは疑う余地がなかった。シュトルムは母の指示に従い、このロケットを墓に戻した。

墓からロケットが発見され、その中身を見たことにより、自分の誕生よりもずっと以前に亡くなってしまっていたフリッツヒェンといわば秘密を共有したというような個人的な接触到に誘発される形でシュトルムはこの作品を書いたのである。

IV

曾祖父を「最後の大商人」¹⁶⁾と書いているように、この一家の栄えた時期はずっと以前に過ぎ去ってしまっていたのであるが、シュトルムはこの母方の家系の曾祖父などの先祖を通して名門市民的な、家父長制的な雰囲気を感じとっていた。一家は、法律顧問や市長を務めるなどフーズムの名門であった。シュトルムは曾祖父を作品の中でフレンツヒェンの父親として描き、市民階級の考え方を体現するものとして暗示している。

「昔」の市民階級では家父長は家族の中にあっては絶対的な力を持っていた。それを暗示する例として、作品の中の祖母は次のように述べている。「お前たちは頭上に厳しい手を感じたことはないでしょう。私たちが遊んでいて、父親の籐の杖がほんとに遠くからでも石にあたるのを聞いた時には私たちはいつもひっそりとしてしまったものですよ。„Ihr habt die harte Hand nicht über euch gefühlt; ihr wißt es nicht, wie mäuschenstille wir bei unsern Spielen wurden, wenn wir den Rohrstock unseres Vaters nur von ferne auf den Steinen hörten.“¹⁷⁾と。子供たちにとっては「昔」の父親はこのような存在であった。

第1章でコンスタンティンとともに和やかな時を過ごし、幸せな気持ちになっているフレンツヒェンは、第二章での60年後のマルチンの祖母の回想によれば、結ばれることなく間もなく死亡している。愛し合っていた二人がどうして結ばれることがなかったのであろうか。作者シュトルムは、このあたりの出来事を描写せず、読者の想像にゆだねる形をとっている。読者は、フレンツヒェンが父親に逆らうことが出来なかったし、またその意志を持ってもおらず、厳格な父親は娘の結婚を許さなかったのだと想像せざるを得ない。ここには具体的な出来事が描写されておらず、ハイゼが指摘しているように、ロマンが欠落している¹⁸⁾。

例えば娘のフレンツヒェンが父親に結婚の許しを願うとか、コンスタンティンが結婚の申し込みをするなどして父親に拒絶されるとか、愛する二人が別れるといったような、物語の核心となっても良いような出来事のシーンは描かれておらず、父親そのものも、物語の表舞台には登場せず、第二章でマルチンの祖母の思い出の中で語られるのみである。祖

母の回想によれば、曾祖父は自分の子供たちを30歳になるまでの長期間にわたって育てるほどの厳格な男だった。また、第1章のフレンツヒェンの「そもそも私たちは兵隊を好きじゃないんですよ。„Wir können die Soldaten eigentlich nicht leiden.“」¹⁹⁾というコンスタンティンに対する言葉から見てとれるように、マルチンの曾祖父、つまりフレンツヒェンの父親は軍隊ぎらいであった。コンスタンティンは軍人であり、貴族でもあった。市民階級の代表的な一人である父親としては階級の違い、すなわち貴族に対する反感を抱いていたと考えられる。軍人かつ貴族であることは娘の結婚相手としては全くもって認めがたいことであった。

V

ここに見られる軍人嫌い、貴族嫌いは作者シュトルムの気持ちそのものであった。当時、プロイセンの町ポツダムは軍人があふれているいわゆる軍都であった。

シュトルムはベルリンで文化人たちと交流を持つようになるが、フォンターネには、「教養ある人たちの集まりでは、人格ではなく、階級、称号、勲位やそれに似たたぐいの些細な事に重点を置いている」²⁰⁾ことに不満を漏らしている。また、軍事予算があらゆるものを食いつくしているプロイセンにへきえきしている。

シュトルムの貴族嫌いについては、今回見ている『陽の光のなかで』より以前に書かれた作品を振り返ってみると、フーズム時代の『広間にて』に見受けられる²¹⁾。家族や来客が広間に集まって、誕生した女の子の洗礼を行う日に、その家の祖母が思い出を語る。この時、祖母は、昔は静かで控えめであって政治に首をつっこむ者は少なかったと語り、さらに、今ではユンカーみたいで皆が政治にかかわりたいのか、と洗礼を受けた子供の父親に問いかける。これに対して、父親はそうだと答え、貴族はなくしてしまおうと語る。これはシュトルムの貴族嫌いが表現されている一例ととらえられる。

このポツダム時代には、シュトルムの人生観や教育論があらわれていると広く理解されている詩『わが息子たちに „Für meine Söhne“』が書かれている。この詩は、シュトルムの「完全に非プロイセン的な、徹底的に民主的な世界観」²²⁾を表現しており、トーマス・マンもこの詩、特に第5節に感動したとのことである²³⁾。

わが息子たちに

真実をけっして隠してはいけない！
それは苦痛をもたらしても
悔恨はあたえはせぬ
だが真実は真珠だから
それを豚どもに投げてはならぬ

もっとも気高い心の花は
 思慮あることだ だが ときには
 黄金の無分別も
 夕立のように爽やかである

故郷のひどい粗野にあつたら
 顔をそむけず対するがよい
 いんぎんなお愛想には
 黙って道をあけるがよい

どうしても娘を妻に
 ほしいと思わぬところでは
 誇り高く身を持して
 その家の客とならぬがよい

たとえどのようなものになるとしても
 仕事をおそれず 気をくばるがよい
 しかし お前の魂を
 立身出世からは守りぬくことだ

あらゆる種類の俗人どもが
 金の仔牛を囲んで踊っていても
 しっかりと身を保て！ 人生の
 最後に頼りになるのは自分だけだ

(五木田浩訳)²⁴⁾

作品のなかでフレンツヒェンとコンスタンティンが結婚に至ることが出来ないのは、貴族階級と市民階級の間の対立からであるが、例えば『水に沈む』で見られるように、シュトルムは階級の違いを結婚を阻害するものとして描く。しかしながら、他とは違ってこの作品においては貴族階級が市民階級を拒絶するのではなく、逆に市民が貴族を拒絶することによって愛する二人の結婚を妨げている。

VI

深見茂氏はシュトルム文学に存在する二つの感動の併存を指摘し、次のように述べている。「恋人や友人たちが真摯に誓い合う情景の清らかさと深さに感動する心は、常にまた、人の誠のいかにうつろい易く虚飾に満ちたものかの姿をまのあたりにしての嘆きの思いに掻き乱される。また、若者らの青春の命みなぎる素晴らしさと美しさに、まるでおのれ自身の生命までもが昂揚したかのごとく心奪われたかと思うと、たちまち、滅びに向かって

「老いさらばえ、忘れ去られ行く人間の生涯とその営みのはかなさに気持は哀愁に沈むのである」と²⁵⁾。

『陽の光のなかで』の第1章で幸せの頂点にいるかのような愛する二人は、第二章において結ばれなかったことが報告されるとともに、帳簿を前にして力なえて居眠りをするフレンツヒェンの姿が描かれ、さらにはその死が語られる。墓の中のこわれたお棺、祖母の思い出の中にふっと浮かんだ花輪、これは何年も前に朽ちてしまっていたであろうが、このようなものが無常感をかもし出している。

しかし、この作品においてはシュトルムは無常の感じのみを抱かせて読み終えさせるのではなく、将来への希望を持たせてくれる。

フレンツヒェンの死から50年あまり後、彼女たちの場合と似たような状況が生ずる。孫のマルチンの婚約者は褐色の目をしており、この一家にとっては異質な存在である。しかし、昔とは違って今は新しい時代であり、マルチンに迷いは無い。妨げになるようなフレンツヒェンの父のような存在もない。祖母はマルチンに、「夕方おまえの婚約者を連れておいで。古い引き出しのどこかにまだ結婚式用のネックレスがあるはずですよ。それが褐色の目に似合うかどうか試して見ましょう。„auf den Abend bring mir deine Braut! Es muß in den alten Schubladen noch irgendwo ein Hochzeitskettlein stecken; - wir wollen proben, wie es zu den braunen Augen läßt.“²⁶⁾」と言って異質な存在の受け入れを許容する意志を示す。このように希望ある将来を結末で描くことによって、シュトルムはポツダムでの「苦しい現実」から逃れる夢を見たのである。

注

- 1) 角川文庫「愛のいざない」春田伊久蔵, S.142.
- 2) Karl Ernst Laage : Theodor Storms Welt in Bildern, Heide in Holstein 1987, S.11.
- 3) Ebd., S.12.
- 4) Karl Ernst Laage : Theodor Storm. Leben und Werk, Husum 1979, S.28.
- 5) Th. Fontane über Storm in „Von Zwanzig bis Dreißig“. In : Laage (Anm. 4), S.30.
- 6) Ebd., S.30.
- 7) Karl Ernst Laage : Theodor Storm. Im Sonnenschein, Hans und Heinz Kirch. Heide in Holstein 1976, S.24.
- 8) Ebd., S.21.
- 9) Storm an Heyse : Theodor Storm-Paul Heyse, Briefwechsel. Berlin 1969, Bd.1, S.19.
- 10) Minna K.Altmann : Theodor Storm. Das Persönlichkeitsbild in seinen Briefen. Bonn 1980, S.57.
- 11) Heyse an Storm. Briefwechsel, Bd.1, S.21f.
- 12) Theodor Storm : Sämtliche Werke in zwei Bänden, München 1977. Bd.1, S.103.
注をつけるにあたっては、このテキストからの引用は巻数とページ数のみを示す。
- 13) Bd.1, S.105.
- 14) Bd.1, S.108.
- 15) Bd.2, S.847 ff.
- 16) Ebd., S.848.

- 17) Bd.1, S.109.
- 18) Heyse an Storm. Briefwechsel, Bd.1, S.21f.
- 19) Bd.1, S.101.
- 20) Laage (Anm. 4), S.34.
- 21) 西野雅二『シュトルムの初期の短編』岡山理科大学紀要第29号B (1994), 101—109ページを参照。
- 22) Laage (Anm. 4), S.34.
- 23) 宮内芳明『シュトルム』清水書院, S.69. なお、本稿をまとめるにあたっては宮内氏の『シュトルム研究』（郁文堂、1993年刊）も合わせて参考にさせていただいた。同書は日本人が著したものとしては初のまとまったシュトルム研究書である。
- 24) Ebd., S.67 ff.
- 25) 深見茂『シュトルムとドイツ近代文学』：日本シュトルム協会編『シュトルム文学研究』S.1f.
- 26) Bd.1, S.111.

Theodor Storms „Im Sonnenschein“

Masaji NISHINO

Technische Fakultät

der Naturwissenschaftlichen Universität Okayama,

1-1 Ridai-cho, Okayama, 700, Japan

(Am 30. September 1994 empfangen)

Im Exil in Potsdam war Theodor Storm in schwieriger Lage und konnte wenig schreiben. In dieser Zeit entstanden nur drei Novellen „Im Sonnenschein“, „Angelika“, „Wenn die Äpfel reif sind“ und einige Gedichte.

Diese Arbeit behandelt eine der drei Novellen „Im Sonnenschein“. Diese Novelle hat Storm auf seinen Mittagsspaziergängen „in Sanssouci“ „bienenartig zusammengelesen“.

Sie besteht aus zwei Kapiteln, und das erste und das letzte Kapitel sind durch „ahnungsvolle Fäden (Heyse)“ verknüpft. Sie stellt alte und neue Zeit einander gegenüber; alte patriarchalische Zeit und neue hoffnungsvolle Zeit.